福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

省略現象に関する機能的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 舘, 清隆 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8674

省略現象に関する機能的考察

舘　　清　隆*

（2014年9月30日　受付）

キーワード：省略　英語　日本語　機能　ポライトネス

1. はじめに

本稿では，文の「字義どおりの意味」が何であるかを検討する意味論的考察に加えて，その文とその文に関わる文法現象が「談話の中でどのような役割を果たすか」を検討する機能的考察が言語学的に有意義であると仮定して，議論を進める。ここで言う機能的考察とは，文の意味とは別に，その文が談話の中でどのようなコミュニケーション上の意図で発せられたかを考えることであると言い換えることもできる。本論に入る前に，機能的考察とは何かを，省略現象以外を例にして，より明確にしておくことにする。

生成文法の古典的な議論に従えば，例（1）－（3）において，文体的操作が（a）に適用されて，対応する（b）が派生したと想定される。適用された文体的操作は，（1）の場合には方向の副詞前置（Directional Adverb Preposing），（2）の場合には分詞前置（Participle Preposing），（3）の場合には，形容詞句前置（Adjective Phrase Preposing）である。

（1）　Directional Adverb Preposing

a. The dog trotted up the street.

b. Up the street trotted the dog.

（2）　Participle Presposing

a. The president of the company was standing next to me.

b. Standing next to me was the president of the company.

(Gary 1976: 4)

（3）　Adjective Phrase Preposing

*福井大学教育地域科学部人間文化講座

a. The amount of mercury being dumped into their bays is very important to the Japanese.

b. Very important to the Japanese is the amount of mercury being dumped into their bays.

(Green 1974: 187)

これらの操作が適用された結果である（b）は，論理的意味がほぼ同じである（a）とは異なったコミュニケーション上の意図を持つことをGary（1976）及びGreen（1974）は指摘している。具体的に言えば，（1.b）と（2.b）においては，話し手が，the dogとthe president of the companyの指示対象が問題の場面に現れることはない，と想定している場合に可能な表現であるとGary（1976）は論じている。言い換えれば，方向の副詞前置と分詞前置（Participle Preposing）の二つの操作は，期待に反して（contrary to expectation）という機能を表現（1.b）と（2.b）にもたらすことになる。同様に，形容詞句前置が適用した（3.b）は，話し手が絶対的確信（absolute certainty）を持つ場合にのみ可能な表現であるとGreen（1974）は論じている。言い換えれば，形容詞句前置操作は絶対的確信という機能を表現（3.b）にもたらすことになる。以上のような機能的な考察が，はたして，省略現象に可能であるかを検討するのが本稿の目的である。

本稿では，拙稿（2007，2009，2013）で行ってきたように，（4）で例示される定目的語省略現象と（5）で例示される不定目的語省略現象の区別が言語的に有意義な区別であると想定して議論を進める。[(1)] 意味論あるいは語用論の観点から，自然に回復される目的語の例を括弧の中に示すことにする。定目的語省略現象においては，話し手と聞き手により唯一的に同定可能な（uniquely identifiable）対象が省略されている。例（4.a-c）では，「特定の試合」，「話し手の特定の提案」，「特定の町」が省略されている。一方，不定目的語省略現象において省略されているのは，一般的な何かである。例（5.a-c）では，「本一般」，「食べ物一般」「アルコール飲料一般」が省略されている。この二つの省略現象のうち本論で注目するのは，定目的語省略現象である。また，当該の目的語が統語的な操作により削除されたのか，あるいは，その位置にはもともと空の代用表現（null anaphora）が挿入されていたのかについては，これまでにも拙稿（2007，2009，2013）で行ってきたように，中立的に論ずることにする。

（4）　定目的語省略現象

a. He lost (the race).

b. They accepted (my offer).

c. We were approaching (the town).

Fillmore (1986: 100-102)

（5）　不定目的語省略現象

a. They were reading (books) in the library.

b. He was eating (food) in the cafeteria.
c. He drinks (alcoholic beverages) every evening.

議論は，英語の目的語の省略から始めるが，必要に応じて目的語省略以外の現象，とりわけ，以下の（6）で例示されるような，日本語における主節の省略と考えることも可能な現象も定省略現象として考察の対象に加えることにする。

（6） a. あなたのことは，もう知りませんから（かってにしてください）。
b. はい，もしもし，舘ですけど（どちら様でしょうか）。

目的語省略現象に戻って考察を続けることにする。定目的語省略には語用論的条件と語彙的条件の二つがともに満たされる必要があることに注目する必要がある。[(2)] 語用論的条件として（7）を，語彙論的条件として（8）が仮定できる。

（7） 定目的語省略に関する語用論的条件
定目的語省略が適切に行われるためには，文脈（context）あるいは発話の場面（situation）から，その指示対象（referent）が回復可能（recoverable）でなければならない。
（8） 定目的語省略に関する語彙的条件
回復可能性（7）が保証されている場合においても，定目的語の省略を許さない動詞と定目的語の省略を許す動詞がある。

Huddleston and Pullum（2002: 301）は定目的語の省略を許す動詞と許さない動詞を，それぞれ，（9.a）と（9.b）のように示している。[(3)]

（9） a.	answer	ask	attend	drive	fail(test)[(4)]	fit
	follow	interrupt	lend	lose(contest)[(5)]		obey
	prosecute	pull	telephone	watch	win(contest)	
b.	*enjoy	*punish	*teach	*write		

次の（10）は，定目的語省略に課せられた回復可能性の語用論的条件と語彙的条件がともに満たされるために，文法的な文となる。一方（11）は，回復可能性の語用論的条件は満たされるが，語彙的条件が満たされないために非文となる。なお，次の例文では，問題となる動詞をその動詞に下線を引くことで示す。

（10）　a. I asked him a couple of questions. But he could not answer (my questions).
　　b. It was evident that we were lost. Just then a man walked by. I got out of the car and asked (him) (where we are).
（11）　a. *They played the club champions and enjoyed (them).
　　b. *John did not obey the regulations and they punished (him).

(Huddleston and Pullum 2002: 301)

本論では，以上で要約してきた目的語省略現象についての定・不定の区別と定目的語省略に課せられた認可条件を想定する。この想定に基づいて，定要素の省略現象について機能的な考察を試みることにする。

2. 定目的語省略と不確定性（Indeterminancy）

定目的語の省略は，空の照応（null anaphora）とも呼ばれることからも分かるように，人称代名詞による照応（pronominal anaphora）との類似性が高い。どちらにおいても，前方照応（anaphoric），後方照応（cataphoric），限外照応（exophoric）の三種類が可能である。なお，次の例では，問題の人称代名詞には下線を引き，空の照応表現は $[_{NP}\quad]$ と表示する。発話の場面（situation）が必要となる言外照応の例のために，（12.c）は一緒にアパートから出た夫が妻に対して発した表現であるとする。同様に，（13.c）は教師が教室にジョンがいないことに気付いた教師に対して，隣の席の生徒が発した表現であるとする。

（12）　人称代名詞による照応
　　a.【前方照応】I closed the door and locked it.
　　b.【後方照応】I locked it just after I closed the door.
　　c.【言外照応】Did you lock it?
（13）　空の照応
　　a.【前方照応】John cleaned the room and he left $[_{NP}\quad]$.
　　b.【後方照応】If John leaves $[_{NP}\quad]$, could you clean the room?
　　c.【言外照応】John left $[_{NP}\quad]$.

ここで，定目的語省略に関する語用論的条件（7）を，議論の都合上，再度（14）として示すことにする。

（14）　定目的語省略に関する語用論的条件
　　定目的語省略が適切に行われるためには，文脈（context）あるいは発話の場面（situation）

から，その指示対象（referent）が回復可能（ recoverable）でなければならない。

例（12.a）の人称代名詞による前方照応と（12.b）のような人称代名詞による後方照応の場合には，人称代名詞の指示対象がその前後の文脈（context）に現れている。ほぼ同様に，例（13.a）と（13.b）においては，[$_{NP}$]と表示された空の照応表現の回復可能性は，前後の文脈によって保証されることになる。

一方，言外照応の例（12.c）と（13.c）については，前方照応や後方照応の例とは違って，前後の文脈ではなく発話の場面（situation）が人称代名詞の使用と空の代用表現の使用を保障する。先にも述べたように，言外照応の例（12.c）は，例えば，一緒にアパートから出てきた夫が妻に対して発するという場面が必要となる。同様に，（13.c）は，例えば，教室にジョンがいないのに気付いた教師に対して，隣の席の生徒が反応するという場面が必要となる。場面の必要性という点では，人称代名詞に言外照応と空の照応による言外照応とは同じ振る舞いを示している。

次に，この二つの言外照応現象には違いがないのかという問題を取り扱うことにする。まず，人称代名詞は定表現（definite expression）の一種であることに注意する必要がある。定表現を含む例（15.a-c）では，「食卓塩」，「開いている一つの窓」，「太陽」が話し手と聞き手にとって唯一的に同定可能な対象（uniquely identifiable object）として存在しなければならない。同様に，先の（12.c）の人称代名詞の使用にも，場面として話し手と聞き手が唯一的に同定可能な対象（例えば，特定のアパートのドアー）の存在が必要となる。

（15） a. Can you pass me the salt?
b. Could you close the window?
c. Look at the sun.

では，唯一的に同定可能な対象の存在は，空の照応表現が言外照応の用法として用いられた場合にも，同じように要求されるのであろうか。Clapp（2005）は定目的語の省略を許すleftを主動詞とする次の例を用いて，回復される目的語の不確実性（indeterminacy）を論じている。会話（16）は，パーティの席にジョンがいないことに気付いた話し手Aの発した質問に，Bが答えたという状況で交わされたものである。

（16） A: Where is John?
B: John left [$_{NP}$].
（17） a. John left (this dull party).
b. John left (the party).
c. John left (this place).

d. John left (this apartment).
e. John left (the apartment we are now in).
f. John left (the party we are now at).

Clapp(2005: 121)

Clapp（2005）は定目的語省略の言外照応の例とされる話し手Bによる発言が，実際は，不確実性を含んでいると指摘している。つまり，話し手Bは，（17.a-f）の七つの可能性のうちのどれを念頭に置いているのかは明らかにしないまま，“John left”と発言している。また，話し手Aの方もBがどの意図でそのような発言をしたのか，その段階では，決められないと論じている。例（17.a-f）のそれぞれにおいて，省略されているのはすべて定表現であるが，話し手Bの発言において，その可能性のうちのどれが省略されているとは，決められないということが問題なのである。

この種の不確実性は，人称代名詞の（12.c）によって例示されるような言外照応の場合には，発生しないはずである。（12.c）を一緒にアパートを出た夫が妻に対して発したならば，人称代名詞 it は二人が住むアパートのドアーを指すと解釈することしかできない。また，（18）として再提示する空の照応の前方照応用法や，後方照応用法にも，この不確実性は観察されない。なぜなら，回復されるのは，前後の文脈に現れる the room としか解釈できないからである。

（18）　空の照応
a.【前方照応】John cleaned the room and he left [$_{NP}$].
b.【後方照応】If John leaves [$_{NP}$], could you clean the room?

ところで不確実性そのものは，いわば，人間言語の本質であると考えることができる。例（19.a）において下線で示した目的語名詞句 a dog は，それがどのような犬種でどのような大きさの犬であるかを明示することなく用いられている。同様に，例（19.b）において下線で示した主動詞 kicked は，右足で蹴ったのか，それとも左足で蹴ったのか，また，蹴った回数は一回だけなのか複数回なのかを明示することなく用いられている。

（19）　a. John keeps <u>a dog</u> as his pet.
b. Kate <u>kicked</u> John's dog.

もしここで，本稿での機能的考察を終えてしまうのであれば，次のように結論することになる。

（20）　前方照応と後方照応の定目的語省略
文脈から同一指示の要素が回復できるため，経済性を求めて省略する。

（21） 言外照応の定目的語省略
場面から想定できる一定幅の解釈を残したままで，不確実性を求めて省略する。

人間言語には，経済性や不確実性が本質的特徴として観察できるので，（20）と（21）で考察を終了することは，不可能なわけではない。前方照応と後方照応の定目的語省略（20）については，これ以上検討することはしない。以下においては，言外照応の定目的語省略（21）の機能的考察を，目的語以外が省略されている場合にも配慮しながら，さらに続ける。

3. 目的語以外の省略と日本語

Shopen（1973）は，起点（source）を表す前置詞句が省略された（22.a）と起点が主語として具現化されている（22.b）を比較する中で，興味深い観察をしている。例（22.a）を使用する話し手は，主動詞giveの起点を表す前置詞表現を口にしないことにより，人間関係がぎくしゃくすることを避ける（avoid a personal confrontation）ことが可能であると指摘している。一方，起点を主動詞giveの主語として利用する（22.b）では，主語が省略不可能であるため，昇給をしてくれなかった聞き手（上司とか社長）に明示的に言及するため，人間関係がぎくしゃくせざるを得ないことになる。

（22） a. How come I didn't receive a raise [$_{PP}$] ?
b. How come you didn't give me a raise?

Shopen(1973: 70)

聞き手との摩擦を避けるために，明言をせずにすませようとする傾向は，日本語に頻繁に観察される。このことを見るために，本来接続助詞である「から」や「けど」で終わる文に目を向けることにする。(6) 言外照応の例を見る前に，まず，前方照応の例である（23）と（24）を検討する。この二つの会話において，話し手Bの発話では，主節が省略されている。いわば主節が空の照応現象を示していて，回復されるのは，先行する話し手Aの発話の一部（「遅刻した」や「海外転勤になった」）である。空の主節に前方照応用法が確認できることになる。

（23） A：どうして，遅刻したの。
B：交通渋滞に巻き込まれたから [$_{S}$]。
（24） A：どうして，海外へ転勤なの。
B：自分から希望したわけではないですけど [$_{S}$]。

次に，空の主節に言外照応の用法があるかどうかを見てみよう。「から」で終わる（25）と「け

ど」で終わる（27）は，先の（23）と（24）とは違って，先行する会話，つまり文脈（context）の中に空の主節が指すものを見つけることは，不可能である。その意味では，唐突に発せられた文である。空の主節が何を指しているかというと，場面（situation）からいくつかの可能性が読み取れる。つまり，言外照応の例ということになる。言外照応の例（25）の主節は，例えば（26）のように回復可能であり，言外照応の例（27）の主節は，例えば（28）のように回復可能である。先に論じた目的語の省略の場合と同じように，省略部分が先行する文脈から回復される場合には唯一的な回復が可能であるのに対して，場面から回復される場合には一定の幅があり不確実性が残る。ついでながら，日本語において主節が空の場合に，後方照応の例を組み立てるのが困難であるように思えるが，この点については，立ち入らないことにする。

（25）　あなたのことは，もう知りませんから [$_S$　]。
（26）　a. 好きなようにしてください。
　　b. 私には，かまわないでください。
　　c. 私の近くには，いないでください。.
（27）　はい，もしもし，舘ですけど [$_S$　]。
（28）　a. どちら様でしょうか。
　　b. 何かご用でしょうか。

主節が空の照応表現となっていて，言外照応の用法で用いられる時には，どのような機能が果たされるのかをここで問題にしてみよう。Shopen（1973）が前置詞句の省略について指摘したように，人間関係がぎくしゃくすることを避ける（avoid a personal confrontation）という配慮が働いた発話であると考えるのが自然である。発話（25）に続けて（26.a-c）のどれかをあからさまに口にすれば，厚かましい響きを持った発言となる。同様に，発話（27）に続けて（28.a）もしくは（28.b）をあからさまに口にすれば，厚かましい響きが発生する。

Brown and Levinson（1987）は，ポライトネスに関する一般理論を提案する中で，英語の主節を欠いた文についてほぼ同様の指摘をしている。聞き手の面子（face）を侵害する可能性が一定程度まで高いと判断される場合には，（29）のような省略（ellipsis）を含んだ不完全（incomplete）な文を使用するという策略（strategy）に訴えることで，明言を避ける（off record）ことになると論じている。

（29）　Well, if one leaves one's tea on the wobbly table, [$_S$　].

Brown and Levinson(1987: 227)

（30）　a. せっかく準備したお茶がこぼれてしまいますよ。
　　b. お茶がこぼれて床が大変な状態になりますよ。

c. カップが落ちて割れてしまいますよ。

例（29）の空の主節には，おおよそ（30）のような幅に収まる解釈が回復されることになる。明言を避けることで，ぐらぐらしたテーブルにお茶を置いたままにしようとする人（聞き手）の配慮のなさを直接非難することを回避している。

議論の出発点であった目的語が空の照応表現であり，言外照応用法で用いられている場合に，「人間関係がぎくしゃくするのを避ける」という機能が観察できるかどうかについて考えることにする。Clapp（2005）の例を（31）および（32）として再提示し，議論を続ける。言外照応の用法で用いられている空の目的語を含んだBの発話は，ジョンが立ち去った理由がパーティにあるのかアパートにあるのかを明言することを避けていると解釈することが可能である。当然のことながら，「人間関係がぎくしゃくするのを避ける」という機能を十分に果たしていることになる。ポライトネス理論に基づいた説明を行うならば，聞き手の面子（face）を侵害する可能性が一定程度にまで高いので，（31）の話し手Bは，明言を避ける（off record）ことにしたということになる。

（31） A: Where is John?
B: John left [$_{NP}$].

（32） a. John left (this dull party).
b. John left (the party).
c. John left (this place).
d. John left (this apartment).
e. John left (the apartment we are now in).
f. John left (the party we are now at).

Clapp(2005: 121)

4. 結論

省略には，定要素の省略と不定要素の省略が区別できることを前提に，機能的な考察を行うことで，空の照応表現について，次の二点を明らかにした。

（i） 前方照応と後方照応の用法の機能は，言語の経済性の追求であるでる。
（ii） 言外照応の用法の機能は，「人間関係がぎくしゃくすることを避ける」ことに関係している。

言外照応用法に関する上の結論は，空の定表現が持つ不確実性（indeterminancy）をもとにして議論されたものである。また，「人間関係がぎくしゃくすることを避ける」という配慮とポライト

ネス理論と関連も指摘されたことになる。

注

1. Huddleston and Pullum（2002）は目的語の省略現象について，八分類を提案している。
2. 語彙的な条件は不必要であり語用論的条件のみで省略現象を扱うことができるという主張については，Groefsema（1995）を参照のこと。
3. このリストは，包括的なものを意図したものではない。例示と解釈するのが適当である。
4. 他動詞 fail には，「（テストに）落ちる」という意味以外に，「（人を）落第させる」「（人を）失望させる」の意味がある。fail（test）の表記は，「（テストに）落ちる」の用法に限るという指定である。
5. 他動詞 lose には，「（コンテストで）敗れる」と「（賞を）取れない」の意味がある。lose（contest）の表記は，前者の用法に限るという指定である。同じことが win（contest）にも当てはまる。
6. この種の文の包括的な議論については，Shirakawa（2009）を参照のこと。

参考文献

Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. Politeness: Some universals in language usage. Cambridge:Cambridge University Press.

Clapp, L. 2005. On the interpretation and performance of non-sentential assertions. In E. Reinaldo and R. J. Stainton (eds.) *Ellipsis and nonsentential speech*, 109-129. Dordrecht: Springer.

Fillmore, C. 1986. Pragmatically controlled zero anaphora. *Proceedings of the twelfth annual meeting of the Berkeley linguistics society*, 95-107.

Gary, N. 1976. A discourse analysis of certain root transformations in English. Unpublished paper. Reproduced by Indiana University Linguistics Club.

Green, G. M. 1974. The function of form and the form of function. *Papers from the tenth regional meeting of Chicago linguistic society*, 186-97.

Groefsema, M. 1995. Understood arguments: A semantic/pragmatic approach. *Lingua* 96: 139-161.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge:Cambridge University Press.

Shirakawa, H. (白川博之) 2009『「言いさし文」の研究』東京：くろしを出版.

Shopen, T. 1973. Ellipsis as grammatical indeterminacy. *Foundations of language* 10:65-77.

Tachi, K. (舘清隆) 2007.「定目的語省略の認可条件について」『福井大学教育地域科学部紀要』. 第Ⅰ部. 63: 45-51.

Tachi, K. (舘清隆) 2009.「定目的語省略認可条件の緩和現象」『福井大学教育地域科学部紀要』. 第Ⅰ部. 65: 1-8.

Tachi, K. (舘清隆) 2013.「不定目的語省略認可条件の緩和現象」『福井大学教育地域科学部紀要』. 第3号. 23-29.